



第 24 回修道会総会

基調講演

ドナルド・シニア師、御受難修道会

私たちが召され、遣わされている ひとつになられた神： 聖書考索

親愛なる皆さま、今日、第 24 回修道会総会にお集まりの会員の方々と、ここに一緒にできることを大変光栄に思っております。ご招待頂き、シスターメリーと皆さまに、感謝申し上げます。復活のキリストによって私たちが担っている、福音の使命の真意について考えるしばしの時間を、皆さまと共に過ごせますことを、たいへん喜ばしく思います。イエスと父なる神はひとつであるように、私たちもひとつになるように遣わされているという、皆さまの修道会総会の印象的なテーマの中に響きわたる根源の意味について、考察してみましよう。

また、現在の炸裂した世界において、この福音書の重要な呼びかけは、まさに時を得たものと言えるでしょう。私の祖国のここ米国でも、様々なレベルで急激に対立的な分裂が起こっており、粗野な政的論争が蔓延し、ほとんど麻痺状態に陥っていると言えるほどです。今の世界を見れば、シリアの悲劇的な状況、ヨーロッパやアジアでのテロ襲撃事件、狂的威嚇から戦争を誘発する恐れさえ見られるアジア情勢のように、実に多くの地域が著しく過激な暴力によって破壊され、脅かされている状態にあります。それほど劇的とは言えないまでも、しかし、私たちのカトリック教会の共同体の中にも、危うい深刻な分裂の溝がいくばくか見られます。このような時期は、特に膨大な歴史があり、深い使命感を有する私たちの信仰共同体にとって、災難ごとをただ書き並べる時ではないのです。もちろん無視できることではありませんが、そうではなくて、今こそ私たちのキリスト教信仰の真意にもっと深く浸りきり、エネルギーと使命感を充足する時なのだと、私は信じています。私が、本日、

注目して頂きたいとお話することは、強く魅了されずにはいられないほどの、福音書の美しさについてです。

数年前、私は、バルバラ・ゴードンの小説を読んだのですが、その内容と印象が読後もしばらく残っていました。そのタイトルは「私は全力疾走している」というもので、米国の主要なテレビネットワークで大成功を収めた管理職の女性の奮闘の話でした。彼女は重要な経営陣としてキャリアの頂点に達していました。が突然、狂気的な仕事のペースと極度のプレッシャーの影響の下、結婚生活の破綻、一人娘との決定的不和、不慣れな失敗や仕事上の目的喪失など、私生活の倒壊が始まったのです。そうしてだんだんと、精神的病いに落ち込んでいきました。文字通り自分のアパートメントに閉じこもり、外出を恐れ、自殺しかねない状態になってしまったのです。この小説は実際にあった話に基づいていますが、特に、自分の生活を取り戻すまでのこの女性の闘いを扱ったものです。恐怖に取りつかれ、寝床から出ることもできないほどの耐え難いパニックの極みにある時、決定的な出来事が起こります。彼女は、もうどのように生きて行ったらいいかわからないと医者に訴えました。医者は、「あなたはたったひとつ、大変重要なことができるのですよ、呼吸の仕方を知っているではありませんか。」と言ったのです。そうして、ただ、しばらく自分の呼吸に耳をすますようにと助言したのです、吸う息と吐く息だけに、耳をすますようにと。

数年後、病いと陰険な崖を登るような長期にわたる闘いの末、やっと正常な生活を取り戻した時、彼女はその医師の言葉を思い出し、自分にとってあの時がターニングポイントだったと悟ったのです。彼女は、どのように呼吸をするべきかは知っていたのです。生きるために息を吸いそしてそのまま吐き出すことを。人間を生かしているのは、生命の運動機能なのです。

息を吸い、息を吐くという基本的な動きが、私たちのイエスとの遭遇、イエスの使命について考えるに当たり、私が、今日使うつもりでいるイメージです。現在は、世界にとって、そして教会にとって不穏な時代です。多大な活力と恵みに囲まれていながら、自明のことですが、世界は、また計り知れない苦悩と喪失に満ちています。私たちの社会生活の列挙でき得るあらゆる懸念事項にも関連して、しばらく前から、修道者も含めて、教会で働く多くの人々が、捉えがたい困難な状態に落ち入っているようです。人数の減少、経費削減、将来への不安などから、多くの分野で希望が抑圧され、存在の維持のためだけの日常には、軽度のうつ的な倦怠さえ見られます。私たちも、全力疾走していると感じているのかもしれませんが。

私たちの心を、精神を、身体を回復させ、生き生きとさわやかに蘇らせる方法はいくらでもあります。キリスト信者としての刷新の方法の一つを、提案させてください。それは、イエスによって私たちに委ねられている使命の深遠さと美しさを思い出すことです。どんな状況にあっても、すべてのキリスト信者の生き方に生命を与える呼吸は、キリスト教の使命だと、私は信じます。イエスとの遭遇は、社会生活に還元することはないような、単に個人的な瞬間なのではありません。そうではなく、福音書のイエスとの真の遭遇とは、イエスの使命に感染して身を焦がし、世界に向かっていくということなのです。

その美しさと深遠さと、その恩恵と変革的な力を持って、統一への呼びかけに磁力のように引き込むイエスの御姿を、世界に広めること、これがすべてのキリスト信者にとって第一の召命です。福音あるいは宣教活動は、ただ単に国々や諸国の民に向けてという古い意味で、理解されるべきものではありません、むしろこうした宣教の形はまだ価値がありますが。また、宣教使命は、キリストの名において霊魂の不滅を獲得しようと祖国を離れる、英雄的な数人の使徒職と限定されるものではないことも、明らかです。過去の数年間を通して、世界におけるキリスト教宣教の真の目的の意味が把握されたことは、私たちが誇るべき重要な進展の一つです。教皇ヨハネパウロ二世は、こう述べておられます、すべてのキリスト信者は、「人類のための神聖な計画を思い出し、奉仕するという預言的義務を担っています。聖典に告知されているように、歴史上の神の摂理の行いに示されるお告げを注意深く読み取ることから明らかになるように、これは人類の救済と和解のための計画です。」広範な深い意味での宣教は、キリスト教信者の生活のあらゆる面、私たちの祈禱、祈りや観想の精神、正義と平和への専心、他宗教の人々との関わり合いそしてその伝統に対する和解と相互尊重に向かう努力、そして自然環境の保護などを含み入れます。教皇の言葉にあるこうした幅広い包括的なキリスト教宣教の意味は、まさに人類と、そこで人類が栄える被造物世界の救済と和解のための計画なのです。これが、3代の教皇が述べられている「新しい福音宣教」です。その精神は支配的でも抑圧的でもありません。福音が、その明示された美しさへの信頼と感謝を持って宣べ伝えられているように、福音宣教は、他宗教の人々、彼らの神聖な伝統、その文化全体を尊ぶ精神において、成されるべきなのです。教皇フランシスコの文書の中で、私たちは「宣教する弟子達」であるようにと、促されています。

イエスの使命とキリスト信者の使命

これは自明の公理ですがここで繰り返してみましよう。あらゆる形態のキリスト信者の生き方は、特に厳格な修道生活をも含めて、イエスの生き方と使命に鼓舞されたものであるべきです。真のイエスとの遭遇においてのみ、私たちは、世界に私たちの使命を見出すことができるのです。また、キリスト信者の使命のあらゆる観念が、イエスの使命からその精神と意味を受け継ぐべきことであるなら、私たちの出発点はそこにあるのです。

息を吸い、そして息を吐くという原始的な人間の機能は、私がイエスの使命について適用しようと考えているメタフォーです。イエスの宣教活動について考察を始めるひとつの方法として、呼吸機能のようにと例えることを、思いついたのです。真の交わりがある所、生命の源の中心に命を引き入れること、そして、遠隔の境界線まで広範にわたって命を届ける、という風にです。手を差し伸べ、そして引っ込める抱擁のようなしぐさです。私は、福音書から少し身を引くようにすると、イエスの使命をより理解できるように思えるのです。イエスの宣教の根源の要素を特徴づけている、手を差し伸べ、そして引き込めるといふこのふたつのしぐさは、相互に関わり合って、ひとつの流れるような動作になります。ふたつのしぐさは、深い信念に満ちたイエスの生き方と、本能的信仰に基づく彼の召命の間を、交互に強く動いたのです。イエスは、迫害されている人々も含めて、イスラエル全域を広く抱擁するために手を差し伸べ、次いで洗われたあるいは汚れたままの手で、全共同体を、ひとつのもの、生命の交わりの神の栄光の中に引き込んだのです。

私の好きな聖句のひとつは、初期教会が創り上げたものではないことは確かな、**マタイによる福音書 11:18** です。イエスが敵対する人々に面と向かって、彼らの攻撃的な言葉を逆手にとり、返答する場面のこの聖句を思い出してください:

『笛を吹いたのに、踊ってくれなかった。葬式の歌をうたったのに、悲しんでくれなかった。』ヨハネが来て、食べも飲みもしないでいると『あれは悪霊に取りつかれている』と言い、人の子が来て、飲み食いすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みが。徴税人や罪人の仲間だ』と言う。しかし、知恵の正しさは、その働きによって証明される。

攻撃的な敵対者たちに対する、その返答に含まれている言外の暗示が、私が述べたイエスの特徴的な二つのしぐさへの、賛美とも言える証しなのです。「徴税人や罪人の仲間」という非難の言葉は、イエスが、特別に境界線を越えて手を差し伸べていることの証しです。イエスは、イスラエルを再建して神に返す召命を担っています。それゆえに、共同体の片隅で疎外され、虐げられている人々、イスラエルの家の「見失った羊」を哀れみのところで、探し出したのです。そして、同時にこの「大酒飲みで大食漢」は、神のパンを分け与えることになる生命の中心へと、酩酊して、自ら引き込まれたのです。福音書の描写にあるイエスの使命の特質を表わす、すべてを包括する食事への賛美が、ここに見られます。

手を差し伸べること、そして引っこめること、この両方のしぐさは、イエスの福音の描写の根源となるものです。歴史上のイエスについての近年の研究も、虐げられた人々、一世紀のパレスチナのユダヤ教社会から、孤立し見捨てられた人々との、イエスの並外れた関わり合いを否定はしないでしょう。例えば、カリスマ的な癒し人として、イエスの施しを強調している福音書のことを思い出してください。来年の主日の福音である、マルコによる福音書の最初の章を開けば、次のような場面が、粗野な詳細にわたって、力強く描かれているのが見られます。日の出から日の入りまで、癒しの施しを成されるイエスの前に、病人であふれた扉が磁力に引き付けられるように開かれます。現在と同様、当時も、癒しは単に肉体的回復だけを意味するものではありませんでした。イエスが肉体型の癒しにも専念されたことは確かですが、癒しとは、古代社会においてのみならず、現代社会においても、病人であるがゆえに経験する孤立感や疎外感を、解消することをも含んでいます。

福音書文学におけるイエスと異邦人との出会いは、実質すべて、癒し物語の文脈の中に現れています。これは、新約聖書の癒し物語に固有の、境界線を破るという特質を映し出している部分です。ほとんどの物語の中で、癒し人（イエス）と癒される者は、タブー、異文化の深い溝を超え、まさに癒すため、癒されるために、生命と死の間さえも超えて、手を伸ばすように境界線を破ります。癒しとは、肉体的変革のみならず、精神的、心理的また社会的影響をも含めて、広い包括的な意味を持っています。解放という言葉は、特に、マルコによる福音書 5:1-20 にある悪霊に取りつかれたゲラサ人の重苦しい描写、あるいは、ルカによる福音書 13:10-17 の腰の曲がった婦人の話など、しばしば癒し物語の中で使われています。少なくとも新約聖書を眺望すると、悪霊によって人間らしさを奪われ支配され、抵抗不可能な状態にある人々を、そこから解放し自由にするというイエスの癒しの使命に、キリスト信者の解放の使命の奥深い基盤が見出されます。癒しまたは厄払い、悪霊からの解放、次いで、共同体の生活に再び戻すことという筋書きで、描かれています。

癒しの物語の中の変質は、単に病人や不具者の肉体上、社会的あるいは精神状態に関わるものだけでなく、また共同体そのものの画期的な挑戦や改革にも及んでいます。ルカによる福音書 13 の腰の曲がった婦人の話にある、イエスによるこの婦人の解放は、シナゴークの指導者の立場からはシナゴークの規律を大きく乱した事件と見られています。イエスは、アブラハムの娘である婦人の権利を、安息日に癒すことで、大胆に擁護されたのです。明らかな宣教物語である、マルコによる福音書 5 の悪霊に取りつかれたゲラサ人の癒しの話では、悪霊が豚の大群に紛れ込み、崖を下って湖になだれ落ちた時、村に大混乱と分裂をもたらしました。がそのあと、悪霊に取りつかれた異邦人は解放され、自らの共同体に完全に受け入れられたのです。マタイによる福音書 15 にある、カナンの女の娘の癒しの物語にあっては、自らの仮定に対して、反論されるのはイエスご自身なのです。もはや彼の使命は、単に、イスラエルの家の失われた羊のところだけに遣わされていたのではないことは、この異邦人の女がその強い信仰によって、イエスの癒しの王国に入ることを許されたという事実により、明示されているのです。

こうした物語は、福音書文学に力強いダイナミックさをもたらしています。このダイナミックさは、癒しの物語にあるだけでなく、また、敵を愛することの教えや、異邦人レビや浮浪者たちへの呼びかけ、ルカによる福音書 15 にある、見失った羊、無くした銀貨や放蕩息子などの有名な慈しみの愛のたとえ話、そしてマタイによる福音書 18 の、許しと和解の義務を訴える共同体での革命的な説教など、様々な文節の中で捉えられます。こうした文節のすべてにおいて、イエスは、追放され迫害され、辱められ、脅されている人々を、共同体生活の枠の中に引き込み、皆さまの修道会会憲が言う「1つになること」へと導いているのです。そしてまた同時に共同体そのものに対しても、回心と心を開くことを促しています。こうした広範で包括的な意味を持つ癒しが、初期キリスト教の使命の本質と理解されています。

イエスの広範な使命の性質の一面として、社会から疎外された人々に注がれたイエスの目を想像してみてください。収税所の徴税人レビ、カファレナウムの百人隊長、カナンの女、道端の盲人バルティマイ、井戸端のサマリアの女、イチジク桑の木の徴税人ザアカイなどに対するまなざしです。また、イエスが、そうした他人から無視されている人々こそ、英雄的徳を有しているのだと確信しておられたのは、山上の説教や他の言葉やたとえ話からも明らかです。イエスは、人間が聖なる偉大さを有していることに絶対の信念を持っておられました。

歴史上のイエスが、境界線を越えて救いの手を差し伸べていたことは明らかです。またこうした挑戦的な救済は、手を差し伸べるのはイスラエルの境界線にとどまらず、それを超えて進むべきという、イスラエルの神の教えの経験に基づいているのは疑いないと、私は思っています。イエスは、たまたま遭遇する異邦人にも同様に心を開いていられました。敬虔なユダヤ教信者であったイエスは、異邦人住居地には出入りしませんでしたし、また、イスラエルの建国を、担わされた第一の使命と考えておられたので、異邦人に宣教はしませんでした。しかし、助けを求める神の子の前では、異邦人であっても、イエスは、明らかに哀れみをもってお答えになられています。初期共同体が、究極的に成すべき義務として定めた基盤は、イエスの名においてイスラエルを超えて救いの手を差し伸べることでした。イエスは、彼を「徴税人や罪人の仲間」と呼んだ敵対者の非難の言葉ゆえに、栄光を獲得されたのです。

次いで、イエスが引き込んだ広がり規模です。歴史上のイエスを理解する上で重要なことは、彼は、イスラエルの共同体から離れたまったく新しいもの、という意味での教会を創建するために、来られたのではないということです。「教会」はすでにそこにあっただけです、神の会衆ケヒッターと呼ばれる、集会所、イスラエルの聖堂です。使徒言行録の描写にある、エルサレムの初期キリスト教共同体のように、イエスは、むしろ、神から与えられたイスラエルを修復する召命とは、神の被造の民、シナイ山の契約に閉じ込められている民に、新しい命と、「心と魂を1つにしたもの」、深い共同体意識を吹き込むこととみなしておられたのです。こうして、驚くべき皮肉さと神からの恵みの楽観主義の頂点に達したイエスは、ぼろをまとったみすぼらしく貧弱な12人の弟子の一群を集め、イスラエルの12部族の王座に就けることを彼らに約束するのです。

また、イエスの生涯の特質のひとつである非凡な食事には、明らかに内的意味があります。徴税人レビとその仲間たちとの食事、ファリサイ派のシモンとの食事、丘の上での群衆との食事、弟子たちとの食事。道路のあちこちに招待客があふれている婚姻の祝餐、食べ物が山のように盛られ客を探し回る贅沢な宴会、東西から来た異邦人がアブラハム、イサクとヤコブと共にテーブルに付く食事、痛恨と切望に浸った過ぎ越しの祭りの食事などの、架空上の食事は、たとえ話の中に描かれています。

初期共同体は、こうした特別な食事を、砂漠でマナとウズラを人々に与えた神を喚起するものとして、そして来るべき聖餐の前兆として見ていたのでしょう。どの場面でも、

そうした食事は、イスラエルの集合として、すべての神の子を包み込む交わりとして、イザヤ書 25 にあるように、シオンの山で宴会を開き、良い肉とえり抜きの酒を民に供され、死のクモの巣を取り払い、すべての顔から涙をぬぐうイスラエルの神と共に、喜びと賛美とあふれ出る活気の中での究極の聖餐の前兆として、イエスの使命の本源的意味を現しているのです。

手を差し伸べること、引き込むこと、包容と交わりという表現で理解されるイエスの使命は、最終的には彼自身を死へと導き、深い愛の行いとして十字架に意味を与えます。イエスは、彼の生き方のゆえに死へ導かれたのです。

手を差し伸べることそして引き込むことという、こうしたイエスの生涯の特徴的な記述や意味深い様式は、イエスご自身のイスラエルの神の経験にさかのぼることができます。その神は部族だけの神でなく、国々の神です。並外れて美しい神は、イスラエルの想像していた境界線をはるかに超えて、はるかに大きな希望をもたらしたのです。その神の際限のない愛、驚異的な哀れみの施しは、人間の心が捉えられる以上のものでした。この神が、イエスの生き方の土台、彼の使命の基盤でした。初期共同体の直感的な聖霊は、イエスがその生涯を通じてこの神を顕示しただけでなく、イエス自身が、その肉体を持ってこの神聖なる実在を体現したのだ、と示すことを可能にしたのです。

ここでもうひとつの直感的思考、近年、前面に出てきた使命に関する教会の教えについて触れましょう。最新の神学、聖書学上の使命の基盤は、神そのものの生き方、すなわち三位一体の神秘です。神は、並外れた愛を持って手を差し伸べるという衝撃的な使命を、体現なされたのです。神である人から放出される信じられないような、抑えきれないほどの計り知れない愛、三つのものがひとつになるほどの強烈な愛、創造の業へ向かって波のように押し寄せる愛、人々の人生に、歴史の中に広がる愛です。そしてその愛の究極の意図は、神そのものの存在の底知れない美しさと生命力の中に、すべての被造物を引き込み、すべての生きとし生きるものの交わり、ひとつのものを創造することです。皆さんの会憲のヨハネによる福音書の味わいある言葉のように、「父よ、あなたが私の内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を1つにしてください。彼らも私たちの内に居るようにしてください。そうすれば、この世は、あなたがわたしをお遣わしになったことを信じるようになります。」

これが究極的な生命の働き、息を吐き息を吸うことです、手を差し伸べて、引き込むことです。この神聖な命のリズムが、すべての使命の土台です。旧約聖書における使命に関して述べている素晴らしい書物の中で、ルシアン・ルグランは、この神聖なリズムは、イスラエルの生命に固有の、ダイナミックな切迫感に共鳴するものがあると指摘しています。ルグランは、本質的なダイナミックさは、旧約聖書のなかに、すでに明示されていると見ています。そこでは、イスラエルが選民として選ばれることと、その歴史的相互関係という2本の柱のもとに、国々への「使命」とも言えるような宣教を広げていたのです。イスラエルは、唯一の権威的な地位を持つ国家を想像していたとはいえ、また、アブラハムとサラの神であるイスラエルの神は、国々の神でした。必然的に、それゆえにイスラエルは、他の国々と関わらざるを得ませんでした。ある時は、宗教的清浄の名のもとに周りの文化に対抗して、またある時は他の国々と影響し合い、あるいは他民族の土台である文化や宗教機構を吸収し、さらには神自身の浄化やイスラエルの懲罰の道具として、他の国々に入り込むというようなやり方で関わって行ったのです。

こうした帰属意識と救済との間の、共同体と使命との間の、排他主義と普遍性との間のダイナミックな緊張感は、旧約、新約聖書のどちらも含めた聖書全体を通して、弧を描くように存在しています。イスラエルは、その歴史を通して、正義と哀れみの共同体を建設するという契約を担う、神の特別な民族という選民意識と、アブラハムの子孫であり、神の最後の抱擁を得る運命を持つ民族でありながら、まだ国々を放浪しているという実態に、囚われてきました。選出と救済。共同体と使命。息を吸うことと息を吐くこと。これが、私たちの教会とまた同様にその信仰共同体のすべてに、命を吹き込むべき靈魂なのです。

私は、年を重ねるにつれて、イエスが究極的に意味することを捉えるためには、ますますヨハネによる福音書に頼るようになりました。この福音書が、皆さまのノートルダム教育修道女会としての伝統であり、ひとつになることを探求する皆様の使命にとって重要なことは存じ上げています。イエスとその使命を描いている共観福音書の複雑さから、少し離れて、それを蒸留し、太字で印をつけ、そのすべての究極の意味を直撃している、ヨハネについて考えてみましょう。

ヨハネによる福音書は、飾り気のないしかも意味深い様式で書かれています。ヨハネは、その福音書を、イエスの究極の起源は神にあるということを断言している、味わいある賛歌で始めています。神は話します、そして、この言葉は、誰が神かとはっきりと表現す

るほど非常に雄弁に、実に完璧に話します。このみ言葉が、まさに、テオス、ギリシャ語の神です。なぜなら神は伝達したいからです、神は息を吐かねばなりません、み言葉は神から世に遣わされました。まったく完璧に世に浸透し、言葉は肉となり、人の歴史と、人の体と魂と身体を持ち、世に具現化された人の姿を取った、み言葉となりました。これが、ヨハネが、あえて言おうとしたイエスの究極の起源です。イエスは、神を現わすことばであり、肉となって世に遣わされた神のメッセージなのです。

もしイエスが世界への神のみ言葉として特定されるなら、神がイエスを通して言いたいことは何なのでしょう。み言葉とは何なのでしょう。ヨハネの答えは、絶対的で深遠なものです。ヨハネによる福音書3節ほど、適切に言っている文章は、ほかにはないでしょう、「神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された。世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。」神のメッセージは、裁きではなく、贖罪の愛です、これが福音の核心です、これが、み言葉が世に言わねばならないことです。これが第一の福音です。

そして、ヨハネによる福音書では、神のみ言葉の償いの愛の究極のメッセージは、イエスのあらゆるしぐさの中に、説教の中に、その特徴ある行動にも、癒しの施しにおいて、真理を伝える預言的言葉に、弟子たちとの関わり合いのすべての中に、現されています。こうした表現のすべては、究極的には愛の言葉、命の言葉なのです。だからこそ、イエスの使命の最後の表現、肉となったみ言葉が世の私たちに告げるべき最後の、最も雄弁な宣言が発せられたのは、逆説的に、彼の死を通してなのです。ヨハネは、イエスの死は、友情の愛の行動として理解しています。「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」イエスの死は、愛の行いなのです。

そうして、福音書の結末として、ヨハネは、その全体の円を完結させます。神のみ言葉としてのイエスの最終の運命は、喜びと賛美の中に、彼をこの世に遣わされた神の愛を持って、ひとつになること、究極のコミュニオンです。それでヨハネは、イエスの死の瞬間を、神のみ元へ戻ることと、み言葉が切望している愛の完全な交わりの元へ「天に上がった者」と描写しています。そして、ヨハネによる福音書は、イエスに起こったことは、人の運命でもあると断言しています。聖霊の力を通して、弟子たちもまた、イエスのように愛することを、彼らの友人のために自らの命を捨てることという愛の言葉の意味を学んでゆくのです。そして、イエスの場合と同じように、人の運命の終点も、すべてがひとつになる時、神

との交わりの時なのです、「父よ、あなたが私の内におられ、私があるの内に居るように、彼らも私たちの内に居るように。」

ここが、歴史上のイエスと信仰のキリストが、一つに溶和したところです。ナザレのイエスは、神の存在への深い確信とイスラエルの神の経験によって生命を吹き込まれ、超越的な聖性と畏敬の念に満ちた美しさを有し、さらに際限なく優しく、どんな場合も寛容な愛をお与えになったと記述されているとしたら、そしてまた、こうしたことが、イエスの使命と教えにある特徴的な信念の核として、銘記されているとしたら、それは、神の聖霊が、初めから教会に寄り添い、神の存在がイエスを完全に満たしていたゆえに彼こそが実際に肉となった存在である、という理解へと導いたからなのです。全身から聖霊を放っていたナザレのイエスは、実質上、聖霊の一部となっていたのです。イエスは、神を現しています、奥深い教えによってのみならず、神の子として体現し、神を顕示しているのです。

福音書の描写にあるイエスと、イエスの独自性と信仰の特性についての教会の断固たる確信の間にかかる橋は、それほど遠いものではありません。パウロのおかげで、手がかりとなる展望は得られます。教会はキリストの体です、ただ同じようなものとしてではなく、深い形而上の真実としてです。教会は、中傷に満ちた脆弱な共同体と見えるかもしれませんが、教会の中に、教会を通して、復活のキリストは存在し、体現化し、世に姿を見せていると、私たちは信じています。

何年も前のスヒレベークスの洗練された神学思想による貢献は、いまだに保持されています。教会は、イエスとの遭遇という基礎的 sacrament であり、教会の特定する他の秘跡儀式のすべては、最終的には基礎的 sacrament の表現であるというものです。ここで新たな疑問が、付け加えられることとなります。もし教会が、この世のキリストの体ならば、教会の行動とその使命は、福音書に描かれているイエスキリストの根源特性と同じものを目的とするべきではないかという問いです。私たちは、イエスの生き方の詳細なレベルまで、模倣することはできません。私たちは初世紀のパレスチナ人ではありません、カリスマ的ユダヤ人の癒し人でもなく、救世主的な教師でもありません。しかしながら、根源を定義するというレベルでなら、イエスの使命の特性と教会の使命との間には、確かに一致するものがあるはずで、イエスの生き方と教会の生き方のどちらも、ともに、イエスによって顕示された神の特質に土台を置いているはずで、そのどちらもが、その根源の調和の中に、根を下ろしているはずで、その土台のメロディーが、私たちが最後に言葉にすること、成すことのすべてに、一貫した音色を与えるに違いないのです。

結論

息を吐くことと息を吸うことが、この世の神の御業の隠喩とするなら、すなわち、人や被造物の境界線まで、哀れみと正義の救いの手を差し伸べ、そして彼らを、命と愛の生き生きとした交わりの中に引き込むことがイエスの使命の定義なら、これこそが、教会の、そして教会内のあらゆる使徒職の本質的な使命であるということになります。もし教会が、キリストとの遭遇の秘跡であるなら、これはまた、すべてのキリスト教共同体、教区であれ修道会であれ、あらゆるキリスト信者の集団の根源的特質を定義するものです。この世の神の御業を映し出し、キリストの使命と調和した宣教の意味は、ただ救いの手を差し伸べるだけでなく、また集合させるという行動をも含みます。多くの場合、私たちは、遠くで傍観しているだけです。宣教は、ただ、境界線を越え、日常の共同体生活から離れた地域で、熱狂的に活動を行うという意味に、捉えられがちです。また、私たちが属している被造物世界との生命力に満ちた交わりには無関心の、古臭い聖職者文化のままの共同体は、内向的になり分裂してしまいました。こうした一種の聖職権主義的文化については教皇フランシスコが、頻繁に、ご自分の言葉と行動で挑戦しておられます。

もし、三位一体の神の命に根ざし、究極の命と神との交わりを目指す探求が、私たちが召されている使命の目的であるなら、その時、私たちが促されている冒険は、種々の日常の懸念事よりもはるかに重要で、私たちの想像をはるかに超えたきびしいものとなるでしょう。このことは、今の私たちにとって、大変重要な意味があります。多数の共同体で、数の減少が起きている時です、同時に、私たちは、気が滅入るようなスキャンダルにおぼれそうに感じています。不安定で何が起こるかかわからないような緊迫した状況にあり、世界がこれほどまで破碎し、分裂しているこのような時代にあって、私たちは、使命のことを考える時、希望なく無意味に感じるかもしれません。実際、私たちはどのように呼吸をしたらよいのかさえ、忘れてしまいそうになります。そうあってはならないのです、私たちは、取るに足らない、宗派的なあるいは平凡な何かに携わっているわけではありません。私たちは、生きていくことを自ら思い起こす必要があります。私たちは、ただ、信心深い生活を何となく過ごしているのでもなく、日常の役割を果たしているだけなのではありません。私たちの信仰の源泉そのものである聖書の遺産と、そして皆さんの修道会の遺産と使命によって、私たちは世界の神聖な仕事への参加を喚起されているのです。神の民であるすべての人々に、癒しと哀れみの救いの手を伸ばし、そしてあらゆる文化、人種、年齢の境界線を越えて、すべての人々を、神の祝福を受ける命の交わりに引き込むこと。私たちの宇宙の果てまで手を差

し伸べて、地球そのものとも交わることです。たとえ、私たちが、弱々しく力の足りない者と感じて、たとえ、進む道が常に明るくなくても、その境界線は世界と同じくらい広く伸び、その目的はまさしく神の栄光にほかならない高貴で神聖な仕事に、私たちは携わっているのです。神の聖霊は教会内に留まらず、世界とその民の間を歩き回るのだということは、私たちの聖書の遺産、信仰の伝統の一面です。着いた所で呼吸をするのです。使命の舞台は、単に教会のみならず、世界そのものです。「畑は世界」、これは、種をまく人のたとえ話の説明にある、イエスご自身の言葉です。

種々の懸念や弱さにもかかわらず、今は躊躇したり引き下がる時ではありません。私たちは、精神的疲労に屈することはできません。今は、私たち自身のために、教会全体のために、キリスト信者の次の世代のために、私たちの最良のもの、最も高貴で最も野心的な理想を立ち上げる時です。私たちが福音書のイエスと、もう一度信仰を持って出会う時です、そこから世界に向けてキリスト信者の使命の意味を刷新してゆく時なのです。教会に向けた素晴らしいメッセージの中で、教皇フランシスコは、私たちの生活は、三つの絡み合った基本的関わり合いの中にいるのだということを、喚起しておられます。私たちは、愛の神との関わりと、神の子であるすべての人々との繋がり合いと、そして神が私たちに与えてくれた生活の場である環境全体との関係の中に生きているのです。こうした生命力に満ちた交わりを自覚して、教皇の美しい言葉にあるように、私たちは、「愛の文明を築き上げること」を促されているのです。

キリストの体である教会、この世への神の愛の啓示であるイエスの魂と、ひとつになるよう召されている教会についての考察を、試みてきました。結びのまとめの代わりに、次のような話で締めくくりたいと思います。米国デトロイト市で、心臓移植を待って入院していた男性のことを聞いたことがおありでしょうか。適合する心臓の提供を待っている間に、不幸にも娘さんが、テネシー州で自動車事故に遭い死亡してしまったのです。娘さんの運転免許証には、臓器提供者の登録が記載してありました。医師団はこう尋ねました、「娘さんの心臓を移植することを、受け入れることができるかどうか考えてください」と。彼は、悲しみに打ちひしがれ、混乱し、初めはとてもそんなことは考えられませんかと答えました。が、しばらくして、彼は、「娘は、きっと私が受け入れることを、望んでいるだろうと思います。」と言い、そして娘さんの心臓の移植を承諾したのです。心臓はもちろん、完璧に適合しました。手術後に退院する際の会見で、ある記者がこう質問しました、「あなたにとって、この出来事はどんな変化をもたらしましたか?」。男性はしばらく間を置き、感情を抑えながらこう答えました、「私の人生は、以前と同じはずはありません。なぜなら、私

の体の中に、私を愛してくれた人の、私に命を与えてくれた人の心臓を抱いているのだという
ことを、私は決して忘れることはできないからです。私にとって、もう何も以前と同じで
はないでしょう。」

私たち自身を復活のキリストを体現したものとみなすことは、そうした根源の自覚
の上で、私たちの人生を生きることを意味します。教皇ベネディクトは、信仰年開始のあい
さつの中で言うておられます。キリスト信者であることは、受けた愛の経験として私たちの
人生を生きること、そして恵みと喜びの経験として私たちの信仰を伝えることです。受け
た愛と捧げた愛の経験、吸う息と吐く息、神と人々と世界とひとつになることを探求する経
験は、実にイエス自身の魂を描写しているものです。そして、私たちは、世界のためのキリ
ストの体です、私たちは教会です。愛によって与えられた新しい心臓を抱く男性のように、
私たちにとって、もう何も以前と同じではないはずで

ドナルド・シニア、御受難修道会
Catholic Theological Union
米合衆国、イリノイ州、シカゴ